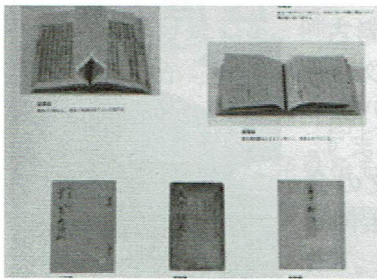


歴博をあるく

## 印刷の歴史を観る

広報部会

私たちは、長年にわたり書物を通じて様々な考え方を文字や図で表現する方法をとってきました。しかし、現在では紙を使わない手段としてスマホやパソコンなどで見る文字や図も有効な表現方法となっています。そこにたどりつくまで、日本の印刷文化は、古代から実に長い歴史があったと思われます。その歴史的な背景がどんな形を辿ってきたか興味ありませんか。今回は各時代の文字や書物、印刷の歴史に関する展示資料（第2室・第3室）を紹介します。



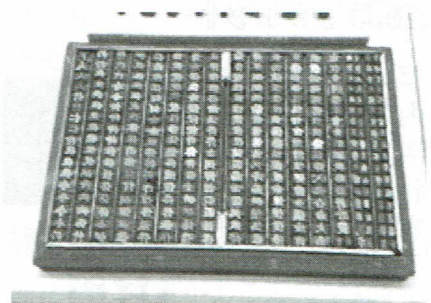
本の姿(第2室)

### 印刷文化

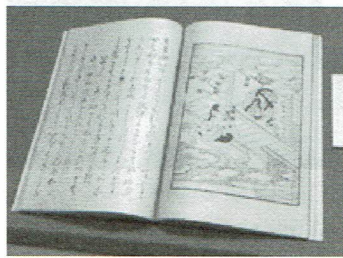
中国では、宋代（960～1279）になると印刷が盛んになり、大量の書物の出版が行われ、日本にも多くの版本が輸入された。その影響を受けて、平安時代中頃から仏教経典を中心に各種の出版が本格的に行われるようになった。京都・奈良周辺寺院から地方に広まり、その対象も仏書から儒書・漢詩文集など、そして『源氏物語』などの仮名文学まで及ぶに至った。そして中世には印刷はさらに盛んになり、全国に伝わり、学問文化の普及を果たすこととなった。

### 板木と活字

印刷には日本では中世まで板木が用いられ、寺院などには大量の板木が收藏されて需要に応じて印刷されてきた。17世紀初頭にはヨーロッパと朝鮮から影響を受けて活字を摺枠に組み並べて板木と同じように摺る古活字版が盛行した。その後書物の需要が増して商業出版が行われるようになると再版の容易な板木が見直され、以後日本では近代に至るまで板木による印刷が中心となった。



駿河版銅活字(第2室)



版本伊勢物語 複製(第2室)

### 和書の印刷が始った

活字印刷によって出版が容易になると、各種の書物が出版されるようになった。なかでも重要なのは、『日本書紀』『伊勢物語』『吾妻鏡』『万葉集』『徒然草』などの書物が出版されるようになったことである。それ以前には、書物が出版されたのは仏教に関するもののみであり、このような文学書が多数出版されるようになったのは、日本の文化史上極めて重要なことである。

### 寺小屋れきはく(第3室)の展示も観てみよう

中国・宋代の印刷技術の影響を受けた日本の印刷技術は、近世中期頃になるとその必要性が高まり、書物や文献の量が増加した。しかし、和紙を利用したこうした貴重な史料も残存状態は良いものばかりではなかった。歴博收藏の資料でも、かつて水に濡れたり、火災に遭ったり、虫に食べられたりして傷みもひどいものも多かった。ここでは必要に応じて和紙の特性を活かした修復方法が紹介され、実際に修復した史料も寺小屋れきはく体験コーナーの右側に展示されている。

### 傷んだ文書の修復方法(漉嵌法)

漉嵌法とは、水に溶かした紙繊維を文書の欠損部分に流し込み補填する修復方法である。

